

長野県革新懇ニュース

2020年10月号
発行日 10月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 00510-3-15971

257

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

==== 今号の主な記事 =====

- 1面 高柳峻さんインタビュー
- 2面 1面続き、「近現代信州の歴史回廊」桂木恵さん
- 3面 「首相は法律を守りなさい」久保亨さん
「ウイルスとの共生」片桐晴夫さん、読者の声、漢字パズル
- 4面 雨よ降れ「石を投げる」窪島誠一郎さん
「写真で辿る信州と戦争」北原高子さん
映画評論『チャップリンの独裁者』内山到さん

長野県革新懇

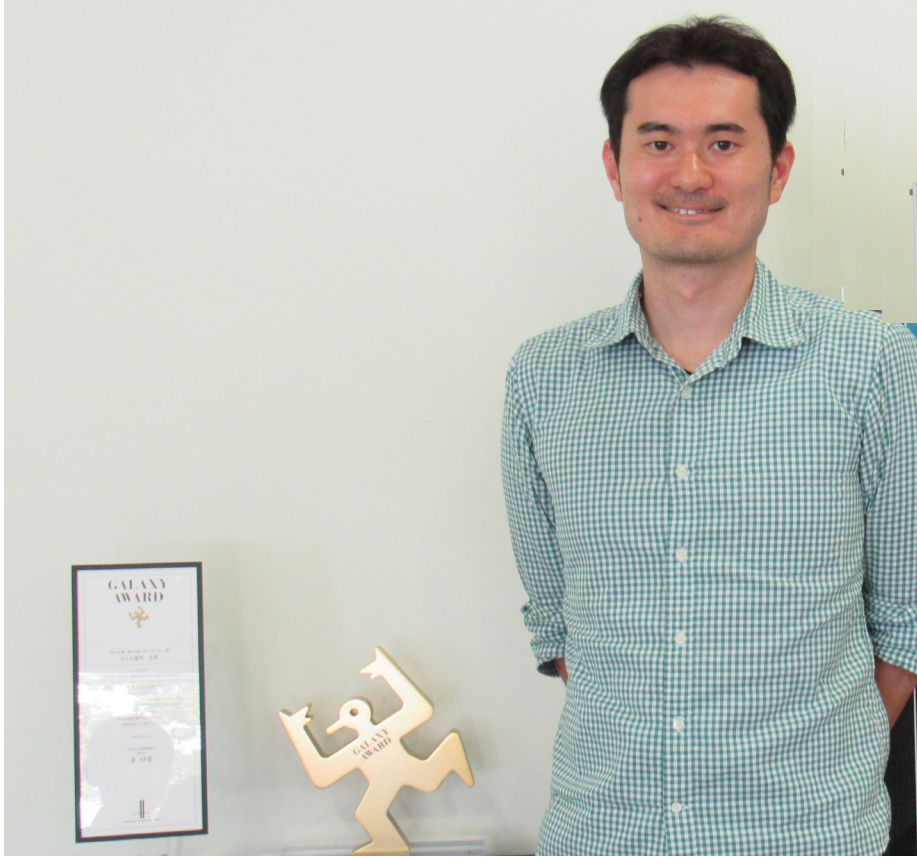
検索



声なき声に耳を傾ける 放送人でありたい

たかやなぎ しゅん
高柳 峻さん

(テレビ信州・ディレクター)



1982年長野県生まれ、東京都出身。明治大学文学部演劇学科卒業。映画美術学校修了。映画会社を経てテレビ業界へ。ビートたけしの番組を演出後、映像作家集団ソリッドジャムに参加。フジテレビ『NONFIX』やNHK『ファミリーヒストリー』『ドキュメンタリー WAVE』を演出。4年前に長野に移住。テレビ信州入社後、情報ワイド『ゆうがたGet!』、『パカリズムの風×桶』、『有名人特製ナビで行く! 宮川千鳥の極上夏休み』を演出。写真左下はギャラクシー大賞の盾と表彰状

大きな自信になった
ギャラクシー大賞

Q 「カネのない宇宙人」がギャラクシー大賞を受賞されたご感想をお聞かせください。

ギャラクシー賞は日本の主要テレビコンクールの中で最も長い歴史を持つ権威ある賞です。キー局、地方局のドラマ・バラエティー・ドキュメンタリー全てのジャンルから選出されます。これまで大賞を最も多く受賞しているのは、圧倒的な予算と人材を誇るNHKです。地方局はほんの一握りです。私の予想は宮藤官九郎さんのNHK大河ドラマ『いだてん』がテレビ史に残る傑作でしたので受賞するものだと思います。それだけに受賞の知らせが届いた時は本当に驚きました。こ

れは紛れもなく「宇宙人の仕業に違いない」(笑)。審査員の方には「地方の身近な出来事を日本全体の歪みとして鋭く描いている」と評価して頂くようです。ローカル局として大きな自信になったと思います。

近視眼的な世相に
警鐘を鳴らしたい

Q 野辺山宇宙電波観測所をテーマに選んだ理由は何ですか？

私は4年半前に長野に移住してきたのですが、長野県は標高が高く宇宙観測所の数が全国的に最も多い県だということを知りました。ちょうど阿部知事が県を上げて「長野県は宇宙県」だというキャンペーンを始めていたんです。それがとても興味深かったし、星の綺麗な所が非常に多いので、この魅力をすぐく描きたいと思っていました。

丁度その頃、相模原障害者施設殺傷事件が起こりました。植松死刑囚が「生産性のない人間はこの国に必要ない」ということを事件の動機として語ったことに、強い衝撃を受けました。実はこうした発言は、植松という特異な人物に限って出たものではないと思います。むしろ私たちがもっている価値観を共有しているのではないかと。つまり、「役に立たないものは必要ない」というような風潮が薄々日本社会に広がっているのではという危機感を覚えたんです。それは、たとえば大学の人文系学部の廃止が唱えられたり、あるいは、ノーベル賞科学者たちが日本の基

礎研究費の予算がだんだん減って、役に立つものだけにすぐにお金になるものだけを国が求めていると警鐘を鳴らす状況があったからです。日本全体で植松死刑囚の発言をどこかでみんなが共有しているところがあるのではないかなという思いがありました。

先ほどお話したように天文学に興味を持ち始めていたのですが、考えてみると宇宙とか星の研究をしている研究者たちは、まさにお金にならないような仕事をしているわけです。そこで、何か研究者たちの人生ドラマというか、どういう理由で研究しているのかということにすごく関心を持ち始めて取材交渉をしました。

番組をご覧になった方は、軍事研究問題が主要テーマとして出てきているようにお感じになると思いますが、そもそもは社会の中で役に立たないと思われるような研究をしている方々の魅力を描いて、目先では実利に直結しなくても長いスパンで見れば人類の進歩に有益になっている、近視眼的な社会であってはいけないという警鐘を鳴らす番組



やせ細っていく
日本の科学界

Q 取材を通じてどのようなことを感じられましたか？

この取材を終えて感じたのは、国が目先の結果が出る研究だけにしかお金をださない制度を作り始めているということです。具体的にいうと、5年前後で結果が出るものをコンペで選ぶ仕組みです。運営費交付金を削減しつつ、研究者の中で競争させて、競争に勝った研究に資金を与えるというシステムです。新自由主義的な「選択と集中」が科学界にも浸透しています。野辺山観測所の立松健一所长たちも資金を勝ち取るために、汗をかきながらやっています。今、汗をかきながらやっているけれども、その研究結果が5年前後に出るものではない限り、なかなか採択されない。

テレビ信州制作『カネのない宇宙人』が放送批評懇談会の第57回(2019年度)ギャラクシー賞【テレビ部門】大賞を受賞。この番組は、日本の宇宙研究をリードしてきた国立天文台・野辺山宇宙電波観測所が財政難で閉鎖の危機に陥っている中、奮闘する天文学者を1年間追ったドキュメンタリーです。ディレクターは高柳峻さん。他のスタッフはプロデューサー/三石剛史、撮影/中村憲一、音効・MA/田畑孝幸、語り/田中泯の各氏。写真はテレビ信州HPより。

再放送について

11/13(金) 14:56~
NHK-BSプレミアム『ザ・ベストテレビ』

※災害などの緊急時には延期の可能性あります。